
ゴーストハント 呪詛の陰

キリ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ゴーストハント 呪詛の陰

【ISBN】

N47840

【作者名】

キリ

【あらすじ】

駅の改札口から降り立つと、あたし（谷山麻衣、一七歳、本業学生）は真っ直ぐハチ公前を通りすぎて道玄坂の方へと向かう。心なしその足取りは軽く、浮き立つ心を抑えきれないまま自然と小走りになっていた。

ゴーストハントというより、原作悪霊シリーズの続編として創った一次創作です。初っ端からネタバレが多くあります（～悪霊の棲む家まで）。原作悪霊シリーズの雰囲気を出すため、ちょっと死

語である言葉も使用しています。

以上を踏まえて、宜しければ覗いてみてください。

最後に、原作は今年11月から新しくなって絶版状態だったものが
もう一度刊行されるそうです。リライト版に合わせて、タイトル変
更しました。

プロローグ

駅の改札口から降り立つと、あたし（谷山麻衣、一七歳、本業学生）は真っ直ぐハチ公前を通りすぎて道玄坂の方へと向かう。心なしその足取りは軽く、浮き立つ心を抑えきれないまま自然と小走りになっていた。

どうしてそんなに浮かれているかつて？

それはもちろん、ナルたちがイギリスから帰ってきたからに他ならない。

あたしが好きになった人はナルでなかつたわけだけど、会えない寂しいと思えるくらいには、ナルにも好意をもつてているというわけだ。

もちろんナルだけでなく、リンさんにもね。

だからまた一人に会えると思うと嬉しいし、ちょっとでも早く会いたいと小走りにもなっちゃう。

ナルたちがイギリスから戻ってきて今日で一週間。

帰国（本当は来日っていう方が正しいんだけど）してすぐに仕事の依頼を受けたため　というより、あたしが無理に依頼を受けさせちゃつたため、事件解決後しばらくオフィスは臨時休業となつていた。

今度はさすがにホテル住まいというわけにもいかないから、ナルは都内にリンさんと二人、ちょっと広めのマンションを借りるみたい。その手続やら荷ほどきやらで、お休みしないといけなかつたというわけだ。

正直、そんなことまったく考えていなかつたあたしに、ナルが嫌味を言るのは当然のことで（それについては反省しきりデス、ハイ）、荷ほどきを手伝おうかというあたしの提案も、そりやあ冷たく却

下されるというものだ。

まあ、それだけならあたしや他の人間でオフィスを開けてもよかつたわけだけど、休みの理由はそれだけでなく、前回の仕事の際に「いぶんと気力を消耗したから」という理由もある。

そう、あしたちのお仕事は気力を使う。なにせ「心霊現象の調査」という特殊なお仕事の関係上、泊り込みで事件にあたつたり、ときとしてお祓いなども必要になつてくるからだ。

このお祓いにも淨靈と除靈というものがついて、どちらもそういう気力を消耗する。

前にあたしも一度淨靈したことがあつたけど、そのときは次の日の昼すぎまでぐつすり眠り込んでたもんね。

そういうわけで、わが『渋谷サイキック・リサーチ』は今日からお仕事を再開。

調査員の肩書きを持つあたしも、こうして数日ぶりにオフィスのある道玄坂をのぼっているのであつた。

そうして坂をのぼると、レンガ色のアンティークなビルが見えてくる。一階がちょっとした広場のようになつた、オシャレなビルだ。中央には噴水があつて、あたしはその噴水のわきを通りすぎてエレベーターへと向かう。

そのエレベーターで二階へあがり、ハイ到着。

インテリア・デザインやら矯正歯科のテナントを通りすぎ、少し奥まつたところに構えるオフィスへと直行。

外界とオフィスとをつなぐブルーグレーのドアには、上半分に模様入りのすりガラスが入つていて、そこに金の纖細な字体で「S P R」 というロゴと「Shibuya Psychic Research」というオフィス名が書かれている。

ここが、本業である学生とは別に、あたしがお仕事をしているわが麗しの『渋谷サイキック・リサーチ』 そのオフィスであつた。

ドアノブを回すと、突然中から笑い声が聞こえてくる。

ナルが大声で笑うところなんて見たことがないし、リンさんについてもそう。

そもそもあの一人が大声で笑うことなんてあるのかなあ？

脇の下をくすぐつても、平然とした顔でイヤミを言われそり……。その他『渋谷サイキック・リサーチ』には、学校は違うけどいつこの先輩であるタカ（高橋優子、苦難の受験生）と安原さん（安原修、花の大学生）という同僚の面々がいるが、タカは受験生だからよほどのことがない限りオフィスには来ないし、安原さんも仕事をサボつてまで漫画を読んだり遊んだりするような人ではない。

なにより、声はひとりではなかつた。

「あれー？ ぼーさんたち、来てたんだ」

中を覗くと、そこには安原さんだけでなく、ぼーさん（滝川法生、ミユージシャン兼坊主）の他に、真砂子（原真砂子、タレント兼靈媒）や綾子（松崎綾子、医者の娘で巫女）、さらにはジョン（ジョン・ブラウン、オーストラリア人の神父）まで各種方面の靈能者たちがそろい踏みであつた。

「おっ、よーやく麻衣も来たか」

そう言つてぼーさんが軽いノリで手を擧げる。

「ずいぶんと早かつたじやない」

綾子が少しだけ横に詰めて、ソファーにあたしの座るスペースを作ってくれた。

「うん、まあ学校終わつて、すぐに來たしね」

あたしはデスクにバッグを置き、コートを脱ぐ。そして自分用のお茶（今日はアールグレイにしよう）を用意してから、綾子の空けてくれたスペースに腰をおろした。

……うーん、やっぱこんだけ人数がそろつと、さすがにせまいなあ。

「こんにちはですー」

テーブルをはさみ向かい合う形で、同じくソファーに座つていたジョンに笑顔を向けられ、思わずあたしも笑顔になる。

「ジョンまで、みんな一体どうしたの？」

「どうしたもの」「どうしたも、あたくしはナルに会いに来ただけですわ」

「あ、真砂子はどうだろ？ね。」

「こつはナルにホの字なのだ。」

夢でジーンとナルを勘違いしてたあとと違つて、最初からここにはナル狙い。

解剖されるんぢやないかっておそれがあるのに、今でも一途に想い続けるあたり、やつぱ真砂子つてば乙女だよな。

「みなさん、所長が戻ってきたところ」とて、歓迎会をするために集まつてくれたらしいですよ

奥の方に座つた安原さんが、ここやかに事情を説明してくれる。

……ほほつ。

なるほど、そういうわけか。

ナルたちが戻つてきてからこつち、すぐに仕事だったし、休みの間はオフィスも閉まつて連絡を取れなかつたから、仕事再開日の今日、全員がオフィスに集まつたというわけだろ？

つて、あれ？

「あたし何も聞いてない！」

「なんだい、なんだいっ！」

「あたしだけノケモノがあつ？」

そう思つて抗議の声をあげると、安原さんが小さく手を擧げてそれをこたえる。

「大丈夫です。僕も聞いてませんでしたから」

「いやいや、そういうことじやなくてつ。

「麻衣と少年はここ」のスタッフだからな。黙つていてもここに来んだろ？」

「そりやせうだけひわ……。」

先にひと事くらい声をかけてくれたつていいじやんか。

……シクシク。

あつ、そういうえば。

「主役のはずのナルはどうしたの？」

あたしのその言葉に、全員が顔を見合せた。

一瞬、誰もが言葉に詰まる。

やがて、その疑問にこたえたのは、やはりというか安原さんだった。

「それがですね、すっかり天岩戸状態でして……」

ナルに歓迎会のことを話してみたものの、あつさり断られて所長室にこもられてしまつた、ということだらう。

リンさんもそうだけど、お祭り騒ぎの嫌いなヤツだからなあ。

人の好意をムダにしあつてつ。

「まあ、天岩戸と違つて、賑やかにすればするほど相手は閉じこもっちゃいますがねえ」

日本神話の天岩戸は、岩戸の前でわざと賑やかにすることによって、それを気になつた神様が岩戸を開けて覗いたところを、引っ越し出すお話だつたはずだ。

ふうむ。

確かにウチの神様の場合、賑やかにするのは逆効果だらうなあ。

「で、だな。そこで、麻衣の出番といつわけだ

へつ？

「あ、あたしい？」

どどど、どうしてそこであたしなんだあ……？

あたしがクエスチョン・マークを浮かべていると、ぼーさんは続けて、

「少年に聞いたぜ。前回の事件のとき、お前さんがナル坊を言い負かして事件の依頼を受けたんだつて？」

犯人である安原氏は、笑顔でこちらに手を振つている。

ぬうつ、よけいなことを……。

それはそれとして、思わずところで白羽の矢が立つたものだ。

どうにも断れる雰囲気ではない。

「 やつてみるけど、あまり期待はしないでよね」

あたしはそう言って立ち上ると、所長室のドアの前までやつて来る。

さあて、なんと声をかけたらよいものか……。

うーん。

そりやつてあたしが悩んでいると、

「 麻衣さん、あんじょう、おきぱりやす」

ジョンの獨特な関西なまりの応援に、思わず肩の力が抜けるたしだつた。

まっ、いいや。

悩んでいても仕方がない。なるようになしかならないだろ？

全員が固唾を飲んで見守る中、とりあえず所長室のドアをノックしよつとしたときだつた。

オフィスのドアが開いた。全員が申し合わせたかのようにそちらを振り返ると、そこにはスーツ姿の男の人人が立つていた。

それも、ここにいる全員が知つてゐる顔だ。

「 うおつ、な、なにがあつたんだ一体……？」

男の人 前回依頼人といつしょにこの場所を訪れた、東京地検特捜部の広田正義さんは、目をまるくしてただただ啞然とその場を動けずにいた。

そりやそつだよね。

ドアを開けたら、ここにいる全員に無言で見つめられるんだもん。

広田さんでなくとも何事かと動搖するに決まつてる。

……はあ。

にしても、広田さんつて……。

「 お前さん、ホンッとに間の悪いヤツだなあ」

あきれたように言つたぼーさんの声が、シンとしたオフィスにこだましたのであつた。

プロローグ（後書き）

十分推敲したので、珍しく書き直すことはないかと思われます。

「ソフナー」とかわざとですかうね？

今回のお話には、明確な敵を出すつもりです。

原作ぐらこの怖さが出せればいいなー（願望）

麻衣たんの頭をナデナデしてあげたい（*。。）＝3ハアハア

10・31・ちょっと書き加えちゃったや。

てかマジで時間がないので続きが書けない。今少し書いてるけど。
産砂先生が出ます。

1

「 今日来たのは他でもない、お前たちに話を聞きたかったからだ」

まさかここでいつきに話を聞けるとは思わなかつたが、 そう言つて切り出した広田さんに、ナルは軽く溜め息を吐くと、少し険のある漆黒の視線をむけ、

「 できれば手短にお願いします」

ええ、これがナルです。

そーぜつに顔はいいけど、おまけに飛び級で大学に入っちゃうくらい頭もいいけど、それに反比例するかのように性格が悪くて、尋常でないくらい高いプライドの持ち主。

傍若無人、傲岸不遜、天上天下唯我独尊。

基本的にナルは誰に対してもこんな感じだし、一度知つてしまえばそんなに気にもならないんだけど、広田さんは若干居心地が悪そうに身動きをした。

それというのも、前回の事件のとき広田さんは、よりもよつてナルを双子の兄であるジーン（コージン・デイヴィス、あたしの初恋の人）の死体遺棄事件における重要参考人として内偵していたのである。

そりやあ、依頼を持ち込む際に「オリヴァー・デイヴィス」ってナルの本名を知っていたのも当然というわけで。

ナルは絶対に自分から本名を名乗らないし、必要なときは「渋谷一也」と名乗るようにしている。だから、ナルの本名を知らなかつたあたしは、ナルシストのナルちゃん、なんてあだ名を付けてしまつたわけなのだが。

まさか、本名であるオリヴァーの方の愛称もナルだとは思わない
しね。

それはともかく。

もともと心靈現象に否定的だった広田さんも、その事件の際に数々の心靈現象と遭遇することによって、今ではそういうた不思議な出来事に対して一定の理解を示しており、一応ナルへの疑いも晴れた形である。

とはいって、ナルを殺人犯扱いしたことには変わらず、加えてかたくなに心靈現象を否定していた広田さんは、事件の際に重要な手がかりを黙秘するというあやまちを犯してしまった。

つまり、広田さんはナルに負い目を感じているのである。

しかし、それでも広田さんは毅然とした態度で、言葉を続けた。
「産砂恵、という女性を知っているな？」

……産砂。

一瞬脳裏に浮かんだのは、ひとりの女性の無垢な笑顔。
それが以前依頼のあつた学校 タカの通う湯浅高校で出会った、生物の先生であることをあたしは思い出していた。

それと同時に、その湯浅高校で起こった事件のあらましも……。
「以前、依頼を受けた学校に務めていた教師の方、としか。 彼女が何か？」

……そう。

対外的には、そういうことになつていて。

湯浅高校で起こった問題は、自然的に大量発生した幽霊による仕業だと。

しかし、あたしたちは知つていて。

あの事件は人為的に引き起こされたものであり、産砂先生こそがその犯人なのだと。

幼い頃に自身の超能力をマスク^{マスク}に否定された経験を持つ先生は、同じように超能力を否定された笠井千秋さんにかつての自分の姿を重ね、否定した人々を次から次に『厭魅』という『呪詛』を使って

襲つたのだ。

最終的には厭魅をおこなつてゐる人形を全て焼き捨て、術者である先生にカウンセリングを行わせることによつて事件は解決をみたはずであった。

まさか、もう一度産砂先生の名前を聞くことになるとは。
もしかして、また同じような事件を起こしたのではないか？

そう、ぼーさんたちと顔を見合わせたときだつた。

「彼女は亡くなつた」

へつ？

思わずあたしは広田さんの方を振り返る。

産砂先生が、亡くなつた……？

あたしは、その言葉をすんなりとは受け入れることができなかつた。

「どうして……？」

呆然と呟いたあたしは、広田さんはどこか言ひよどむような歯切れの悪い言葉で、

「自殺だ。君たちが受けた事件のあと、彼女は故郷である福島の方に戻つている。彼女はそこで、知り合いのつてを頼りに再び教鞭についていたんだが、今から一週間前にその学校で首を吊り、死んでいる」

一週間前というと、ちょうどナルたちが田本に戻ってきたときだ。でもそんな、なんでも……。

「ただし、自殺にしてはいくつか不審な点があつてだな」
不審な点？

広田さんは真剣な面持ちで頷くと、

「まず、彼女の身辺を調査したものの、彼女には自殺する動機となるものが見つからなかつた。そして、彼女にはここ最近、なにやらおかしな言動が目立つていたそうだ。なんでも、幽靈に殺される、とか」

幽靈に殺される……。

それを他の誰かが言つたのだとしたら、こんなにも確信はもてなかつただろう。

だけど、それを口にしたのが彼女だからわかる。

産砂先生は、誰かに『呪詛』をかけられたんだ……。

「実際、その学校では幽霊の目撃証言が多発していてな。そこで、東京地検『ゼロ班』である俺に話が回ってきたというわけだ」

広田さんの所属するゼロ班という部署は、主に心霊現象や超能力、呪詛に関する事件を担当する部署だそうで、本来は名前のない部署なんだそうだけど、誰かがおもしろがつて靈と零をひつかけて名付けたのだとか。

今回の事件も、そうした中のひとつだったのだろう。

それで、過去に彼女が勤めていた湯浅高校の事件と関わりになつたあたしたちに、まず話を聞きに来たというわけだ。

「……そうですか。事情は大体わかりました。しかし、彼女の死にに関する手がかりになりそうなことは、こちらではわかりかねますね。

それではお仕事の方、頑張つてください」

「なぬっ！」

ええい、それでいいのかホントにつつ！

……まあでも、仕事の依頼があつたわけでもないし、確かに『呪詛』であるという証拠がない以上、いい加減なことが言えないのもわかるけど。

「うー。

ナルが席を立とうと腰を浮かし、思わずあたしが口をはさもうとしたときだった。

「待ってくれっ！ 頼む」

広田さんはテーブルに手をつき、頭を下げる。

「俺に、お前たちの力を貸して欲しい。前回の事件でのことを考えれば、都合のいい話だと思うだろ？ 『当然だ……だが、これがもし本当に幽霊とやらに関わりのある事件だとするならば、俺には対処するすべがない。他にこの手の件に関して、信頼の置ける人間も

知らない。だから、頼まれてくれないか？ もちろん、謝礼は「ちらで十分な金額を用意する」

ナルは席を立つたまま、見下ろすように広田さんを見つめる。

「……広田さんは、靈を信じていなかつたのでは？」

どこかもの憂い色のナルの口調。

対する広田さんは頭をあげ、まっすぐナルを見つめかえした。

「……正直、前回の事件のあともずっとと考えていた。あれは一体なんだったのか。本当に靈と呼ばれるものだったのか。俺にはまだ信じられない。だが、一方であれが現実であつたこともわかる。

答えは、『わからない』だ」

それから広田さんは少しだけあたしに目配せして、

「それでも、人がひとり死んでいるのは事実なんだ。だから、何かが起こつていてるのであれば、あらゆる方面から徹底的に調べるのは悪いことではないと思つ」

そこまで言つて、広田さんはもう一度頭を下げる。

「だから頼む。力を貸してくれ」

ナルは肩をすくめ、溜め息を吐くのだった。

一章 奇妙な接点（後書き）

そんなに遅筆な方ではないと思つんですが、どうにも時間がなくて先にすすみません。

最近、仕事して夕飯食べたら寝てるもんなん。勘弁して欲しい。

少しでも面白いと思つてもうえれば幸いです。

あしたたちが福島にある件の学校、尚陽高校へと向かつたのは、その一日後のことだった。

オフィスから休憩をはさみつつ車で約四時間、都会の喧騒からはなれた緑豊かな場所に、その学校はあった。

今回、車の運転はリンさん（林興徐、ナルの助手であり巫蠱道の道士）と広田さんが担当することに。リンさんの運転するウチのオフィスのワゴン車には、ナルと真砂子（本当は調査員であるあしたが乗る予定だつたんだけど、心やさしいあしたは譲つてあげたのサ）が乗ることに。広田さんが借りてきたもう一台のワゴン車には、あたしとぼーさん、綾子とジョンが乗り込むことになった。

安原さんには、何かあつたときのためにオフィスへと残つてもらつている。

結局いつものメンバーで行くことになつたのは、昨日の話の時点でオフィスに全員がそろつっていたから、というのもあるが、産砂先生が亡くなつたのが『呪詛』によるものである可能性が高いと、ナルが判断したからだつた。

相手が靈であるならば、まだいくらでも対処のしようはあるのだが、相手が人であるとなると話は別だ。

ときとして人は、悪靈よりも恐ろしい存在となる。

だからこそ、万全の体制で望むべきだとナルが主張したのた。

……確かに、その通りなんだよなあ。

本当にこわいのは、生きているか死んでいるかではなく、マイナスの『気持ち』なんだとあたしは知つてゐる。それが靈ならば悪靈となるし、人であるならば生きたまま闇に沈んでしまうことになる。

……あたしはかつて、そういう人たちを見てきた。大切な人を亡くし、哀しみに沈んでしまった人。生きることに執着し、人との道を踏み外してしまった人。人を恨み、憎しみにとらわれてしまつた人。 そうして、彼らは人に害を及ぼす存在となつてしまつたのだ。

『呪詛』とはそういうたマイナスの塊であり、人に害を及ぼすだけではなく、呪つた人間の心をも蝕んでしまう。

だから。

やつぱり、このままにしておくわけにはいかないよねっ！

到着して、まずは校長室に向かうのだけど、全員でそろそろと行くわけにもいかないから、とりあえず広田さんとナル、それからぼーさんとあたしで向かうことになつた。

その間にリンさんは調査機材をおろし、ジョンと綾子が周囲の聞き込み、真砂子は異常がないか校舎を見てまわるといった算段である。

校長室ではまず、広田さんが前に出てあいつをした。

「はじめまして、東京地検特捜部の広田と申します」

「校長の遠藤です。産砂先生の件……ですよね」

対する遠藤校長は、とても温厚そうな初老の女性だつた。

広田さんは校長の言葉にうなづくと、続いてナルの紹介をする。「はい。それで、こちらが協力者の『渋谷サイキック・リサーチ』

所長

「渋谷一也です」

ナルは前に出ると、軽く会釈する。そして、あたしたちのことも紹介し、他にもすでに調査にのり出しているメンバーがいることを伝えた。

「お話は伺つております。どうぞ宜しくお願ひします。ですが……」

校長先生はすくべ言つてくそうにする。広田の方を伏し目がちに見ながら、

「その、遠くまできていただいて申し訳ないのですが、調査にはあまり意味がないかもしません」

「意味がないとは?」

言つて、ナルの目が鋭くなる。

「私どもとしましても、職員が幽霊に殺されたなどと妙なウワサが立つのは困りものなので、今回の調査については大変ありがたいお話なのですが。実は産砂先生が亡くなられてから、幽霊の目撃情報については、とんと聞かなくなりましたね」

産砂先生の「幽霊に殺される」という発言が、生徒たちの間に幻でもみせたのではないか。

少なくとも、遠藤校長はそう考へているようだつた。

「それについてば」「心配なく。そういうことも含めての調査ですか
ら」

そう。それについては、ある程度予測がついていたことだつた。
この件が『呪詛』によるものであるとするならば、産砂先生が亡くなつた時点で相手の目的は達成されているのである。

調査することはすでにむずかしく、意味がない可能性が高い。
ナルが最初、この件に関わらつとしなかつたのに何、そういう理由もあつたのだ。

まあ、それでも引き受けた以上、しっかり仕事をやるのがナルのスタンスだけね。

それに、これは考へたくないけれど、『次』があるかもしれません
いから……。

「そう、ですね。……あ、こちらは三年生を教えてます学年主任の佐藤さん。みなさんのことは彼に一任していますので、何かご用があれば言いつけてください」

校長先生に紹介され、室内にいた中年の先生が頭を下げた。

一章 奇妙な接点？（後書き）

次からはもうちょい軽いノリになるかと。
ではまた次回ノシ

校長室を退出すると、こつものよひに建物の位置を確認するため、佐藤先生にざいひと学内を案内してもらひ。

「 すいぶんとお若いんですね」

佐藤先生は、チラリとナルの顔を伺つと、小声であたしにだけ聞こえるように言つた。

「よく言われます。でも安心してください、ウチって腕だけは確かですから」

あたしは、ちからこじぶをつくつてアピールする。

……とはいえ、普通は心配になるよね。

所長はアレだし、他のメンバーもはつきりいって一般の人が想像するような靈能者からはほど遠い。信用しろという方が難しい気がするもん。

ところが、

「 そうですね。特捜部の方がご紹介されるくらいですから」

佐藤先生が微笑う。

おおっ！

そつか、今回は広田さんの紹介だしね。

さすが、信頼の東京地検特捜部。どんなにうわべくわへい相手でも、評価を一転させやうなんだな（オイオイ）。

ナイス、広田さんっ！

あたしが振り返ると、広田さんは眼をパチクリとさせる。そうするうちに、廊下の向こうに真砂子の姿を見つけた。

「あつ、真砂子だ。おーい、真砂子ーお！」

すると向こうにもいちいちにぎりに気づき、まっすぐあたしの前までやって

くる。

無言の視線。

「……真砂子?」

「あんまり大きな声で呼ばないでくださいまし。」口ちが恥ずかしいですわ」

「ああ、はいはい。

そいつはどうもすみませんねっ!

むつとあるあたしをよそに、真砂子はそのままナルの元へ向かうと、

「やつぱり、靈はないと思いますわ」

「そうですか?……」

ナルは真砂子からの報告に頷くと、考え込むようすをした。
さて。これで、いよいよ靈ではなく呪詛による線が怪しくなってきたというわけだ。

でも、そうなると一体どう調査したもんだか?……。

産砂先生のとき同様に、呪詛が人形を用いた『厭魅』であるならば、使用した人形はすでに処分しているはずだし、運よくそれを証拠に犯人を見つけたとしても、あたしたちにその人をどうにかする力はない。

何とかしなきゃと思つ反面、あたしたちにできる」となんてあるのだろうかとも思つ。

……ふーむ。

そんなことを考えていると、先を行く佐藤先生の足が止まった。

「……ここです」

佐藤先生が示したのは、今回ベースとして用意してもらつた教室で、ドアの上には「視聴覚室」の札が下がつていた。

おや?

てつくり、普通の会議室に案内されるものだとばかり思つていたんだけど。

すると、佐藤先生が、

「会議室よりも、こちらのほうが電源など引きやすいかと思いまして」

たしかに、それは助かるかも。

なにせ、サーモ・グラフィーやら暗視カメラやら、他にも未だ使いた道のわからないものを含めて、調査にはたくさんの電子機器を使うことになる。普通の会議室で困るということはないけど、こういった配慮は正直嬉しい。心霊調査なんていうと、うさんくさいだのなんだのとイヤミを言つてくるところもあるしね、うん。

そうして、佐藤先生がドアを開けようとしたときだった。視聴覚室の中から、男の人の叫び声が聞こえてきたのは。

「どうしたっ！」

広田さんが前に出て、最初に室内へと踏み入る。次に佐藤先生とぼーさんが。そのあと、恐る恐るあたしが続くと、そこにはアッケにとられたようにこちらを振り返る男の人人が立っていた。

……って、誰？

「御厨先生、一体何をなさっているんですか？」

佐藤先生が溜め息を吐く。

御厨先生と呼ばれた男の人は、取り出したビデオテープを見るよつに手にし、

「はつ、いやあの、授業で使うビデオを編集していたんですが、上から別の映像を重ね録りしちゃいました……」

え？

「……まさか」

広田さんがつぶやく。

さつきの悲鳴つて、そういうことーお？

うつわーあ、なんつ一人騒がせな。

ぼーさんも、

「全く人騒がせなやつちやなー」

佐藤先生は、こっちが申し訳なくなるくらい恐縮して「すみません」と小さく頭を下げるが、あきれ顔で御厨先生の方へと向き直る。

「今朝の職員会議で言つたでしょ。視聴覚室は本日より一時的に使用できなくなります、つて」

対する御厨先生は、ポカンと口を開き、

「……ああっ！ そうでしたね、そうでしたっ！ すみません、すみませんっ」

今思い出したとばかりに、何度も頭を下げる。

大丈夫かなあ、この人？

こんなこといつちゃーあれなんだけど、なーんか抜けてるって感じがする。

でも、どこか親近感のわくタイプだなあ。

「あっ、ではそちらの方が……」

「もうよろしいですか？」

御厨先生の声をさえぎつて、ナルが真砂子といっしょに視聴覚室へと入つてくる。

そういえば、この一人がいたっけか。

「そちらの方は？」

「ああ、歴史を教えています御厨圭吾先生です。御厨先生、こちちは今朝お話した……」

佐藤先生が言つて、ナルを紹介しようとしたときだつた。何か固いものが床の上に落ちる音がする。

見れば、御厨先生が手にしたビデオテープを取り落として、あたふたとしていた。

またこの人は。

「……失礼いたしました。『ゴースト・ハンター』の方、ですよね？」

あらためて、御厨先生はナルに握手を求める。

「『渋谷サイキック・リサーチ』所長の渋谷です」

あれ？

何だろ。何だか違和感を感じる。

まあ、そんなに気にすることでもないとは思つんだけど……。

「僕、大学では民俗学を専攻していくまして、幽霊にも興味があつたんですよ。ぜひ何かお手伝いできることがあれば、言ってくださいね」

御厨先生が微笑う。

「ありがとうございます。それではさっそくですが、佐藤先生と御厨先生に、産砂先生の件について、いくつかお尋ねしたいことがあります」

一章 奇妙な接点？（後書き）

その3です。

今さらだけど、麻衣の一人称はむずかしいなあ。
楽しんでいただければ幸いです。

ナルと広田さんが一人に話を聞いている間、あたしとぼーさんはワゴン車へと戻つて機材を運び込む。ちなみに、真砂子はさつき視聴覚室に入る前にナルから安原さんに連絡を頼まればしく、途中でわかれることになった。

「ねえ、ぼーさん、やつぱり呪詛によるものだと思つ？」

「今回の件か？ とりあえず真砂子が言つにや、ここに悪霊はいないみたいだしなあ。 ただ、自殺する人間ってのは、精神的に参つてる人間ばかりだからなあ。いくら靈に殺されると言つていたとしても、呪詛によるものだと断定はできないだろ」

まあ、ね。

あたしはこれまで死にたいと思つたことは一度もなかつた。
おかーさんが中学んときには死んじゃつたのはとても悲しかつたし、天涯孤独のみなしどとなつたことはとても辛かつたけれど、それでも死んでしまいたいなんて考えたことはなかつた。

こんな性格だし、なにより周りの人たちがやさしかつたから。
中学生のときは面倒見のいい先生がお家に下宿させてくれたし、高校生になってからは同じアパートに住む人たちや大家のおばーちゃんからよくしてもらつていてる。

祐梨や恵子、ミチルといった友人に、SPRの仲間たちもいる。
みんながいるから、あたしは今幸せなんだ。

自殺したいと考える人にも、そういう人たちがいれば マイナスの『気持ち』をためこんで、暗い底に沈んでいる人に、プラスの『気持ち』を吹きこんであげられる人がいれば、きっと自ら死を選ぶなんて悲しい選択をすることはないのだろうと思つ。

産砂先生はどうだつたんだろう?

湯浅高校での事件の際、先生はどうよひもないくじこに闇に沈んでいた。狂っていたといつてもいい。

あのときのあたしたちにはどうするひともできなくて、カウンセラーに任せることぐらいしかできなかつた。

もしもあるときのままだつたとしたら……。

「お前さんがそんな顔をする必要はないわ」

ぐしゃぐしゃ頭をかき混ぜられる。

あたしは顔を上げて、

「……やだなあ。あたし、そんなにわかりやすい顔してた?」

「そりやもう。大方、前の事件のとき彼女を救つてやられてればなんて考えてたんだ?」

ありやりや。

こりや 簡抜けだ。はずかしいことの上ない。

そういえば、前にナルにも同じことを言われたつけ。

あたしつてば、ホントに成長しないな。

「彼女が本当に自殺するほど心を病んでいたんだとしても、麻衣が落ち込むことはないわ。誰でも彼でも救えるほど、俺たちやできた人間じゃねーんだからな」

……うん。

ぼーさんの言葉は正しい。けれどあたしは、「それでも」と思つてしまつ。

あたしは、自分と関わった人たちに幸せになつて欲しいんだ。
そんなふうに考えていると、

「……嬢ちゃん、今度ウチに来るか?」

「んん? ?

言葉の意味がわからなくてキヨトンとするあたしを、ぼーさんが

つづいた。

「だから、今度俺ん家に来るかつて聞いてんの
ぼーさんの、家に、行く?」

ええええっ！？

「どう、どうしたの急に……？」

「いやなに、前から考えてはいたんだけどな。若い女子高生が俺なんかの部屋に来て、何か問題になるようなことになるといかんと思つて誘わなかつたんだが、まあ、遅くならぬ程度なら大丈夫かと思つてや」

「ぼーさんの家か……。

実はず」「一興味があつたりするひー

「梅吉　俺ん家で飼つてる猫な　も、きつと氣に入る思つんだ
が……」

うん。やつぱり、あたしつてばものす」「一果報者だ。
落ち込んだり沈んでたりすると、ひつして手を差し伸べてくれる
人がいる。

「ありがとう、ぼーさん」

「ぼーさんは照れくさむつてぽを向くと、

「んつ。元氣でたか？」

「でた」

「あたしはにーつこり笑う。

「そりやよござんした。　それじゃあ、さつさと調査機材を運び
こむか」「

はーい。

くすくす。

どーしようもなく笑みのこぼれてしまつあたしに、ぼーさんがもう一度ぐしゃぐしゃと頭を撫でてくれた。

そうやつてベースへと向かう道すがら、

「……あのつ、産砂先生のことを調べに来たんですか？」

あたしたちは声のした方へと振り返る。そこにいたのは、三人の女の子たちだつた。

「そつ……だけど？」

それを聞いて、彼女たちはモジモジとする。けれど、意を決した

よう」その中のひとりが、はつきりとした声で言った。

「産砂先生は、自殺なんてするような人じゃないんですよー。」

あたしたちは、思わずお互いの顔を見合わせるのだった。

一章 奇妙な接点？（後書き）

半分寝ながら書いたんで、間違いがあつたら教えてください。
そんなわけで、その4です。

よく考えたら滝川さんとタメじやねーか俺・・・。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4784o/>

ゴーストハント 呪詛の陰

2011年5月16日14時48分発行